

今月のテーマ
長崎サイズ

田上市長の
心と手
～自らの思いを皆さんに語るコラム～

東京でエスカレーターに乗るとき、急がない場合は左側に寄って立ちます。右側は急ぐ人のために空けておくからです。大阪では逆で、右側に寄って立ちます。右と左の違いはありますが、どちらも急ぐ人が増えたからこそ生まれた、思いやりのルールなのでしょう。

でも長崎に帰ると、右にも左にも寄らず自由に立つことができます。少しホッとします。

横断歩道を渡る人の歩く速さも、大都会の方が長崎より速いようです。信号が変わるのを待っている人の表情も少し違うように感じます。

時間の長さとはどこも同じはずなのに、体感時間とでもいうのでしょうか、感じる時間の速さは、まちによってだいぶ違います。

きつとどんな体感時間のまちなのかは、そのまちの個性の一つなのだと思います。

* * * * *
時間だけでなく空間も同じです。長崎には独特の「長崎サイズ」があります。

例えば、アーケードの幅。長崎のアーケードは、反対側を通る人の顔もちゃんと見える

くらいの幅です。他のまちでも大きな商店街の広いアーケードを歩くことがあります。が、あまり広いと何か落ち着かない自分を感じます。長崎人だな、と自覚します。

例えば、くんちの踊り馬場。ふだん諏訪神社に行き、くんちの踊り馬場に立つと、「え？こんなに狭いのか」と感じます。そして、その狭い場所を使って、あんなに大きく見せる伝統文化の素晴らしさを改めて感じます。船のサイズも工夫された演出も、ここで一番采えるように、大きく見えるようにつくられているのだな、と感心します。

例えば、港。小さな港なので、国際クルーズ船が接岸すると、とても船が大きく見えます。あちこちの坂からも美しい船の姿が見え、「今日は観光船が入ってるね」が挨拶になります。

例えば、夜景。大都会の夜景は長崎よりもうんと光の量が多く、どこまでも広がっていて



いるんな所から長崎港を一望できます

華やかです。長崎の夜景はそれに比べるとこじんまりとしているけれど、立体的で、ひとつひとつの光が集まってつくるあたたかい夜景です。

いろいろなところに「長崎サイズ」を感じます。

* * * * *
長崎はもともと山があり、入り江があり、ほとんど平地がない場所。少しずつ埋め立てをしながら平地をつくってきましたが、その少ない土地や平地を使いこなす中で「長崎サイズ」の文化が生まれてきたのだらうと思います。そして長崎人は、それを心地よく感じるようになっていったのだと思います。

「長崎サイズ」は道や広場の大きさだけでなく、人の距離感にも影響を与えているように思います。時代によって少しずつ変わってきてはいるものの、やはり「顔の見える関係」が長崎の基本。43万人が住む都市にしては、まだまだ一人ひとりの顔が見える人間関係が生きているまちだと思います。長崎にいると当たり前なのだけれど、「長崎サイズ」は長崎の大切な個性の一つなのだと思います。



今も愛される「愛八」の墓 長崎らしい階段を上る 高島秋帆旧宅の石垣 長崎茂木街道の石碑

ながさき
フチ旅行
出かけて見る・知るまちのオススメスポット

ぶらりまちあるき
小島界限

正覚寺下電停で下車し、正覚寺方面へ。かつての街道を上ると、立派な石積みが見えてきた。これは、日本の西洋砲術の第一人者、高島秋帆旧宅の石垣。重厚な造りに、思わず足が止まってしまう。

そこからさらに上へ。いかにも長崎らしい階段を上ると、ひっそりと佇む「愛八」の墓が。

「愛八」は、大正から昭和初期に長崎芸妓の名を世に広めた丸山の名妓で、「長崎ぶらぶら節」の小説や映画で注目された人物。とても稽古熱心で情に厚かったそう。

丸山を見守るように、この地に墓がつくられたのだろうか。花が手向けられ、今も愛され続けていることがうかがえた。じっくりまちを歩くと、さまざまな歴史が見えてくる。小島もそんな地の一つだ。